●●特集★大学図書館 今後の展望●●

学習支援は「学生視点」から！

――ラーニング・アドバイザーとの協働――

大和田康代・松野　渉

はじめに

筑波大学附属図書館（以下，当館）では学生の能動的学修をサポートするため，本学大学院生をラーニング・アドバイザー（以下，LA）として雇用し，本学学生を対象とした学習支援活動を行っている。本稿では当館のLA制度の概要と最近の活動を紹介する。

経緯

当館では2010年度にラーニング・コモンズの設置と学習支援サービスの強化を重点施策とし，2011年9月に中央図書館に「ラーニング・スクエア」を開設した。このラーニング・スクエアにおいて，学生による支援（ピア・サポート）を行うために考えられたのがLA制度である。2011年5月からの試行を経て2012年4月から正式にサービスを開始し，現在は5年目になる。

2016年度は7名のLAがラーニング・スクエア内の「学生サポートデスク」（以下，デスク）で学生からの学習相談に対応している。勤務は大学の授業がある期間中の平日14:00－19:00で，1コマ2.5時間の交代制をとっている。

なお，当館のLA制度の詳細については「筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動」[1]でも報告している。

運用

制度の運用は当館の職員で構成する「学習支援推進ワーキンググループ」が行う。2016年度はその中に3名のLA担当が置かれ，LAの初期教育（事前研修および勤務開始直後のOJT）や日常的な活動支援，連絡調整等にあたっている。

学生アシスタントのトレーニングについては事前研修やOJT，情報共有の仕組みが重要とされている（呑海，2013）[2]。当館でもこれらを重視しており，新規採用者への初期教育では「図書館の非常勤職員としての自覚」「ライティング支援の心構え」等を入念に指導している。特にライティング支援については具体的な実践方法のマニュアルを用意してLA全員が一定以上のレベルで支援を行えるよう注力している。LAには修了や就職によるメンバー交代があるため利用者への対応スキルの確保が大きな課題となるが，当館では十分な初期教育を行うことでスキルの維持・確保に努めている。

また，情報共有にはGoogleドライブとメーリングリストを利用するほか，毎月1回のミーティングも行う。ツールの活用に加えてLA全員とLA担当職員が顔を合わせる機会を持つことが，円滑な活動の実施に役立っている。

活動内容

LAの活動内容は多岐にわたるが，代表的なピア・サポートとして期待されるのが“ライティング支援”である。

デスクでは，文献検索からレポート・論文の執筆までの学生の主体的な学習を総合的に支援している。LAは自らも本学の授業を受け，レポートや論文に取り組む学生なので，実際に本学の授業を経験していない図書館職員には難しい“自身の経験を生かした効果的な支援”が可能である。サービス開始以来のライティング支援相談件数増加は，ピア・サポートの有用性を示すものと思われる（図1）。

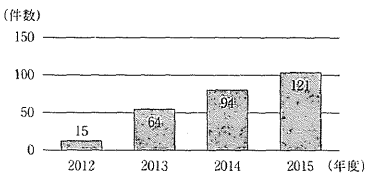

図1．ライティング支援相談件数の増加

また，デスク以外での活動の一つとしてLAセミナー（LAが主体的に立案・企画・運営を行う講習会）がある。具体的な実施例については後述するが，最近では学内他部局との連携により，学内URA（University Research Administrator，以下，URA）[3]を講師に迎えてのLAセミナーも開催されている。

なお，その他の主な活動には以下のようなものがある。

・ブクログを使用した学習支援図書のレビュー[4]

・デスクでの相談対応Q＆A集の作成
・LA主体の館内展示の企画・立案・実施
・デスクのプロモーションビデオやWebページ“図書館小技集”[5]の作成

LAセミナーとは

LAの活動の中でも特徴的と言えるのがLAセミナーである。附属図書館ではLAセミナー以外にも職員主体，あるいは教員との協働によるさまざまな講習会・講演会・セミナー等を実施している。しかし，それらはあくまでも教職員の立場から企画され，「学生に身につけてほしい能力」を意識した内容・構成となっている。一方で昨今の学生が置かれている学習・研究に関する環境は多様化・複雑化の一途をたどっており，こうした環境下で教職員の立案する各企画は“意義”は深くとも必ずしも学生の“ニーズ”に合致していない可能性がある。

LAセミナーはそういった点を意識し，立案からLAのアイディアを重視して企画されている。ピア・チューターである彼らの視点が，教職員だけでは発想し得ない学生のニーズの汲み取りに非常に効果的なのである。

2015年度のLAセミナー

2015年度は大学院生を主なターゲットにした「伝わるアウトプット術」[6]と「申請書で伝えるあなたの研究セミナー」[7]という二種類のLAセミナーを実施した。「アウトプット術」は日常的なゼミでの研究報告，学会での発表，学際的交流の場などのシチュエーション別に，自身の研究をどのようにアウトプットするかを現役の大学院生であるLA自らが自身の経験を踏まえてレクチャーするというもので，小規模な会場にもかかわらず20名以上の参加があり，好評を博した。

「申請書」セミナーは主に日本学術振興会特別研究員（以下，学振）への採用を狙う大学院生を対象とし，紙面の限られた各種公的書類の中で効果的に自身の研究をアピールするためのノウハウの習得を目的としている。このセミナーでは企画段階からURAと協力し，学内の学振採用学生も交えたレクチャーやワークショップなどさまざまな形態を織り交ぜて実施した。このセミナーは前後編の二度にわたって実施され，合計で約40名の参加があった。参加者のモチベーションは非常に高く，セミナー終了後も，会場となった中央図書館が閉館する直前までURAと熱心に話し込む参加者の姿が見られた。

写真1．LAセミナーの様子

こういった過去のセミナーの好評を受け，今年度もLAセミナーを実施する予定である。LAと図書館職員が一丸となり，今後の実施に向けて現在鋭意準備を行っている。

おわりに

以上が当館におけるLA制度の概要と最近の活動である。誌面の都合上すべての活動を詳細に紹介することはできなかったが，それらの活動を総括するならば「学生視点」という言葉に尽きると思われる。

LAを雇用することにより，図書館職員だけでは難しかった視点の発見やニーズの掘り下げが可能になり，より学生や利用者に寄り添ったサービスの実現が可能になる。今後ともこのようなLAとの協働体制を維持し，より利用者のニーズに合致した学習支援サービスを提供できるよう，図書館職員も力を尽くしていきたいと考えている。

注

1）村尾真由子ほか．筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動．大学図書館研究．2014，(101)，p.108-118.
2）呑海沙織，溝上智恵子．大学図書館におけるラーニング・コモンズの学生アシスタントの意義．図書館界．2011，63(2)，p.176-184.
3）“リサーチ・アドミニストレーターとは？”．筑波大学URA研究戦略推進室．http://ura.sec.tsukuba.ac.jp/ura/info/%E3%83%AA%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%81%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%83%89%E3%83%9F%E3%83%8B%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%81%A8%E3%81%AF%EF%BC%9F/．（参照 2016-10-07）.
4）“筑波大学附属図書館ラーニング・スクエア☆学習支援の本棚”．ブクログ．http://booklog.jp/users/tulips，（参照 2016-09-27）.
5）“かゆいところに手が届く！図書館小技集”．筑波大学附属図書館．http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/tips，（参照 2016-09-27）.
6）“No.79第1回LAセミナー伝わる研究のアウトプット術ダイジェスト”．筑波大学附属図書館．http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/prism/?p=1156，（参照 2016-09-27）.
7）“No.81申請書で伝える！あなたの研究セミナーダイジェスト”．筑波大学附属図書館．http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/prism/?p=1187，（参照 2016-09-27）.

（おおわだ やすよ・まつの わたる：筑波大学附属図書館）

［NDC10：017.7 BSH：大学図書館］